



第251號 (第 22 卷)

(昭和17年) 第 5 號

卷 頭

メートル法へ進め

隨 筆

山 本 一 清

吾々が、會の設立以來、度々主張してゐることは、學界の趨勢にかんがみて、萬事にメートル法を徹底することである。ところが、會員の中には、年々新入者があつて、之等の人々がやつぱりインチや、マイル等々を會の中に持ち込んで來るには閉口する。望遠鏡の口径は“インチ”で言ふ惡風が今尙止まらないのは困つたものだ。殊に、最近には、我々は英米兩國と戰爭状態にあるのであるに拘らず、大小の天文家は、平氣で敵國の尺度を使つてゐて、少しも改めやうとしないのは、どういふわけであらうか？

天文學界にインチやマイルが今尙止らない原因の一つは、先輩たちが惡例を残してゐるからである。これ等の先輩たちは、多く英米の天文學書で勉強した人々であるから、望遠鏡と言へば、皆、“口径何インチ”と言はないと、ピンと頭に來ないらしい。又、月までの距離や、太陽の直径等と言ふ場合にも、“何マイル”と言はないと承知が出來ないらしい。實に之等は學界の叛逆者であり、舊秩序の保守主義者である。これからの新しい天文家たちが、こういふ頭に指導されてゐては、進歩發達の餘地が無いと言はなければならない。

メートル法は、決して外國の尺度ではない。何十年前から、チャンと我が國法によつて定められた尺度であつて、日本人たるものは、一日も早く、この尺度に慣れなければならない義務があるのである。況んや、大東亞に於いても、歐洲に於いても、樞軸各國の協同によつて、近い將來に、ウンと新しい世界の秩序が作られやうとしてゐる今日である。新しい時代に入つて、英國や米國などと言ふ國は“昔話”になつて了う時になつても、“口径何インチ”だの、“距離何ヤード”だの、“面積何平方マイル”だのと言つたやうな物の言ひ方をしてゐては、正に國賊だと思はれても致し方があるまい。

吾々は、斷然として英米の尺度を排し、國法の命ずるメートル法に徹底しなければならない！ 望遠鏡の口径はミリメートルか、又はセンチメートル、又、焦點距離はセンチメートルを以つて言ふのが最も合理的である。其の他、天體の距離にしても、直径にしても、皆キロメートルを使用すること、又、溫度は

必ず攝氏の寒暖計にすること等々、之れ皆、わかり切つたことであるのに、用ひない人が今尙多いのは、皆、國家社會の進運に對して盲目であり、又、怠惰である他に、原因は無い。本誌は、今後、一層この點に注意して、會員一同の奮勵を望む次第である。

“インチ”でなければ望遠鏡の口径が理解出来ない人よ、今日から直ちに頭を改革して、メートル法の練習を御やりなさい。“換算”の率など考へてゐるから、いつまで経つても“インチ”から解脱し得ないのだ。3吋、4吋、10吋などいふ言葉は全く棄て、新しく75ミリ、10センチ、25センチといふ言葉を鵜呑みに覚え込んで了うのです。

冬の気温は、日本人が皆幸ひに攝氏で測つてゐる。しかるに、夏の暑さになると、大部分の人が華氏の寒暖計を用ひて、100度だとか、110度だとか言ふから、オカシク致し方が無い。そのくせ、そんな人々でも、病氣になると、夏冬の區別なく、体温が38度だとか、40度だとか言ふのだから、笑はざるを得ない。

若し、こゝに人があつて、長い物の長さを測る時には曲尺を用ひ、短かい物の長さを測るときには鯨尺を用ひるとしたら、どんなものでせう。ナルホド、之れならば、長い物は益々長く聞こえ、短かいものは益々短かく聞えて、人は驚くかも知れないが、しかし決して之れは物の真相を適確に把握する所以ではない。ところが、冬の寒さを攝氏で測り、夏の暑さを華氏で測る人は正に此の如き非學理的な人なのである。人をびつくりさせることには役立つかも知れないが、之れによつて、人を誤ると共に、自己も亦一種の催眠術にかゝつたやうになつて了ひ、眞理を握むことは不可能となるのである。

昔、ドイツは、普佛戦争の後、メートル法が、敗けた敵國の尺度であるに拘はらず、それは合理的な尺度であることを覺つて、敢然として之れを自國に採用した。我が國に於いては、メートル法は既に國法であつて、決して敵國の尺度ではない。進んで之れを用ゐるべきであり、大に之れは愛用すべきである。

英米兩國の重大な缺點は、保守主義にある。勿論、英米人と雖も、インチやフィートよりも、メートル法が合理的であることを知つてゐる人は多い。故に、電氣に關する學術や、スペクトル學等に關するものは、皆、國際上の通念から、メートル法を用ゐてゐる。しかし、之れは極めて一局部の人々にのみ用ゐられてゐるに過ぎない。何故、英國人や米國人が立派なメートル法を用ゐないのかと言ふと、何も理由らしい理由は無い。只、變更するのは面倒だといふことだけである。一種のズルイ感情問題に過ぎない。しかして、此ういふ感情や、ズルサに囚はれてゐるがために、世界の新時代といふことを認識せず、遂に我が日本にも、ドイツにも立ちおくれて、國を滅亡に導くのである。

メートル法を用ゐるか、否かと言ふことは、新時代を脊負ふ將來の國民たる

の試金石となるのである。

我が國の對英米戦は、急速に進みついある。英米への開戦以來、未だ三ヶ月にならないうちに、フィリピンやマレーは勿論、蘭印の大部分が全く皇軍の手に歸した。やがては、濠洲も、インドも、或は英米の本國までも、日章旗の下に置かれる日が来るであらう。こういふ時がやつて來た場合に、吾々學者は、軍人將士の偉勳を辱かしめないだけの腕前を以つて、學術上に世界を指導する用意と實力とを養ひついあるや、否や？

特に、多くの學術の中でも、天文學は、我が國に於いて大いに遅れてゐた。天文臺も少いし、天文家も少い。器械も至つて貧弱で、歐米の50年前の天文學界と同程度の設備しか、今の吾々は有つてゐない。之れでは、實に寒心に堪えない。大戦争が終つて、我が國威が全世界を覆ふ日が來て、白人も黒人も、皆一様に我が日本の旗の下に集まつて來る時、天文學界だけは、やはり、我々の方から敗軍の彼等に低頭しなければならない状態に止まるかも知れないことを、吾々は今から心配してゐる。

我が國の天文學界に著しく貧弱なのは、天文臺が少いことと、觀測者が少いことである。理論家は多少居る。しかし、望遠鏡と其れを操る觀測者の實力は、今の我國は外國の第3流國にも劣る有様である。之れでは前途甚だ寒心である。元來、我が國民は世界のどこの國民に比べても優秀な國民であり、頭腦も、手腕も、判斷力も、劣るものではない。ところが、何故に、天文學界だけが此んなに桁違ひに各國以下に劣つてゐるのであるか？ 之れは國民一同が胸に手を置いて考へて見なければならぬ問題である。

今から300年前をかへり見ると、ニュートンやフラムスティードに比べて、保井春海や、關孝和は決して桁違ひに劣つた人では無かつた。又、彼地にラプラスやベセルが居た時代に、我が國には麻田剛立や高橋東岡や間重富等は決して劣等な人では無かつた。百般の文運が急激に進歩した明治時代に至つて、天文學だけは三段も五段も立ちおくれ、取り残されて了つた形である。今日、ジャワにさへ口径65センチの大望遠鏡が活動して居り、濠洲にさへ、第一流の太陽觀測所が立派な成績を擧げてゐるのである。此ういふことを考へて見ると、何とかして、新時代に即應するために、我が國の天文學界は奮起しなければならない。試みに現代の天文學書を開いて見るが宜い。其所に出て來る學者の名の99%までは歐米の學者の名ではないか？ 天文臺だつて、日本の天文臺が、今まで、果してどれ程の成績を擧げたか？ 我が日本に於いては、設備の立派な天文臺ほど、成績は逆に擧げられない。そして、ホンの片手間に時間を費してゐるアマチュアの仕事の方が、比較上から言ふと、大きい成績を擧げてゐる。こんな例は外國には無い。